



退職にあたって

中井 直正

若いときから、なかなか意見が通らず、少数派になることがしばしばありました。特に全く新しいことを提案したときには必ずと言ってよいほど反対されてきました。粘り強くやっていたら何とか7、8割のことは成就するのですが、その過程においては苦難と忍耐の連続でした。この経験から、日本の研究を発展させるためには大学の教育から変えないといけないという思いがありました。

2004年に筑波大学に勤務する機会をいただいたときにこれを少しでも実践しようと考えました。通常の授業でも少し取り入れましたが、紆余曲折の末、2008年度から大学院共通科目として「発明発見はいかにしてなされたか」のちに「研究学」という授業を行うことにしました。

学生に提示した授業目的は以下のとおりです。「独創的な研究や優れた仕事を行うには何が大切かを知るひとつの方法は、歴史に学び、人に学ぶことである。大発見した例、それを逃がした例を分析してなぜそうなったかを考え、良くも悪くも教訓として学び、それを自らの研究人生に活かすことが大切である。またその大切なものは分野によらず共通である。研究に限らず、会社の製品開発、営業、中高校での教育、政治社会、あるいはひとり人間としても基本的には大切なものは同じである。本講義では主として近代現代になされた発明発見の過程を追い、優れた研究を行うには何が大切かを共に考えていきたい。またそれを通じて自ら学ぶという姿勢(自分で自分を教育する力)を身につける。」

具体的には、「発見はどこから生まれるか」、「頭の中のコンクリートを破壊せよ」、「(無意識の)欧米崇拜からの脱却」、「研究の賞味期限」、「アイデア創出論」、「ノーベル賞からみた独創的研究のための8つの法則(石田寅夫@鈴鹿医療科学大学)」などをできるだけ事例を通して講義しました。また、受講生には発明発見(優れた仕事)の例をひとつ調べ、それが成就した鍵は何か、それから何を学ぶか、という報告書を提出してもらうとともに授業で発表してもらいました。

講義の最終回には、そもそも論として「何のために研究や仕事を行うのか」を話しました。これが最も大切なことです。工学、経済学などのいわゆる実学の必要性は誰でもわかるのですが、理学などの基礎科学、文学、歴史などは説明が必要です。また会社で何のために仕事をするのかについては多くの人が誤解をしているので、これも話しました。生活費を稼いで物質的豊かさを得るためだけではありません。

会社の役割については、法政大学の坂本光司氏によると、「会社経営とは“五人に対する使命と責任”を果たすための活動」であり(「日本でいちばん大切にしたい会社」2008 あさ出版)、優先されるべき順に、

1. 社員とその家族を幸せにする
2. 外注先・下請企業の社員を幸せにする
3. 顧客を幸せにする。
4. 地域社会を幸せにし、活性化させる
5. 自然に生まれる株主の幸せ

とのこと。顧客よりも社員が先にあるのは、社員が欲求不満やストレスでいつもイライラしている状態で顧客を幸福にできるわけがないからです。顧客を幸せにするためには、まず社員を幸せにしなければならない。「自然に生まれる株主」とは、会社の理念や仕事に共感してその会社を応援したいと思って支援してくれる株主のことです。

さらに、「社員と顧客を大切にする会社「7つの法則」を実践する優良企業48」(2012 坂本光司、PHP ビジネス新書)によると、その7つの法則とは、

1. 社員の幸せを第1に考える
2. 障がい者雇用に尽力する
3. 高齢者を積極的に活用する
4. 女性を重要な戦力に変える
5. 仕入れ先とWin・Winの関係になる
6. 顧客に対して感動を与える
7. 地域社会との絆を大切にする

です。「感動」というのが味噌です。これらを実践すれば、その会社は結果的に常に商売繁盛し、永続的に存続します。詳細を書く紙面はありませんが、創業以来数十年間継続して増収増益を続けている「未来工業(株)」、寒天製造という斜陽産業でありながら50年以上も増収増益を続けている「伊那食品工業(株)」、長年に渡り「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」の上位に掲載される旅館「加賀屋」などを講義の題材にしました。一度入院したらまた入院したくなる「亀田総合病院」も教訓的です。「伊那食品工業」は社員458名、年商200億円弱と大きくはありませんが、トヨタ自動車の豊田章男社長などが何度も訪れて学んでいます。大卒12名を募集したら、1200名が応募してきたという会社です。個人としてはiPS細胞の山中伸弥氏や書道家の武田双雲氏も題材にしました。武田氏が有名になるまでの過程は非常に面白く、また考えさせられるものです。有名になったのは結果にすぎません。

残念ながら、受講生の数は毎年15~20名と多くありませんでした。大学院共通科目としては平均的な数ですが、全院生に学んでもらいたいと思っているこちらとしては落胆する数です。学ぼうとする人は積極的で、「履修するつもりはなかったのですが、今日出席したら面白そうだったので途中からでも受講してよいですか」と参加してきた女子学生。大学院を修了済みであるにもかかわらず全部出席して宿題の報告書も提出してきた研究員。ある出版社の人に、こういう授業もしていますと話したら東京から毎回やってきて全部の講義を聞いて下さった社会人の方。本当にありがたい話です。しかしながら、日本の教育を変えたいと思っていた身としては、日本どころかひとつの大学、ひとつの専攻さえも変えられず、「大海の一滴」しか与えられなかった力不足を申し訳なく思っています。

2018年4月からは関西学院大学に移動しましたので、もう少し回数を増やした同じ授業を再び開講しています。関学はキリスト教系の大学で、「Mastery for Service (奉仕のための練達)」を理念としていますが、実態はかなり空念仏(仏教用語)化しているようです。私はその意味を「しっかり勉強して、人を幸せにできる人間になりなさい」、そして卒業したら「人を幸福にいなさい」ということだと解釈しています。これは単なる慈善行為ではありません。優れた研究・仕事を継続的に行うための最強の理念です。そうすることによって結果として、人生に意味を与え、自分自身も生きることができ、首から上だけの人生の星野富弘氏やスーパーボランティアの尾畠春夫氏は良い例です。会社は継続的に商売繁盛、増収増益となります。

2018年7月からクロスアポイントメント教員として10%だけですが再び筑波大学の教員に戻りました。集中講義または講演会などで、何のために学ぶのか、何のために研究や会社での仕事を行うのかを学生達とともに再度学ぶことも考えています。